
メッシュ・ザ・タヌキ

nakoso

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メッシュ・ザ・タヌキ

【Nコード】

N3628D

【作者名】

nakoso

【あらすじ】

いつも通りの日々。いつも通りの帰り道。『その日』、帰り着いた俺の部屋には、宇宙からやって来たタヌキがいた！？

バイトを終えてから家に着いてドアを開ける。居間に入った俺は、一瞬にして頭が白くなった。

……どうしてタヌキがいるんだ？

六畳の居間に、一匹のタヌキがいた のだが。

……どうしてオレンジの毛なんだ？

そいつは姿はタヌキそのものだが、毛がオレンジ色という、見た事もないヤツだった。

「おう、お帰り」

熱心にテレビに見入っていたタヌキが振り向いた。

「タヌキがしゃべった」

「石岡^{いしおか}信くん。いつまで突っ立ってるんだ？ まあ座れよ」

「しかも俺の名前を知ってる」

「ところでこのお茶、シケってるんじゃないか？」

ガラス板のテーブルに置かれた茶碗を器用に右手（足？）で持ち上げる。

「何様だおまえ」

「何様とは失礼な。この状況で驚くのは仕方ないが、もう少し口を慎め」

「タヌキから命令口調」

「そう落ち込むな」

「……疲れてるな俺。きつとバイトのしすぎだ。きつと帰り道の電車だ。早く起きなきゃ。寝過ぎしたら終電なくなっちまうわ」

「水でも飲みな」

ぽんつ。

台所でゴソゴソやっていたタヌキが、コップ片手に俺の足を叩いた。

タヌキを見下ろす。二足歩行で立つタヌキの背丈は、ちょうど俺の腰辺り。

「脊椎の具合は平気か？　おいタヌキ」

「飲めつて」

勧められた水を何も考えずに飲んで　　吹き出した。

「熱っ！！」

「ぎゃはははは！　湯だよ湯！　水だと思ったらとんだ勘違い！！」

ざばあ。

「あちあちあちあち！！」

笑い転げるタヌキの上にコップを引っくり返したところ、悲鳴に変わった。

「あちいだろ!？」

「ってゆーか、おまえは何だ？」

のた打つタヌキの睨みを俺は余裕で見下ろす。

「見てわかんねえのか？」

本気で言ってるのか、こいつは。

コホン。タヌキは咳払いを一つして、テーブルの脇であぐらを掻いた。無言のまま、テーブルを挟んだ座布団を指す。

座れ、という意味らしい。

夢なら早く醒めてほしい。けどタヌキが夢に出て来るなんて、何の暗示だ？

それとも、これは幻覚？ 疲労が限界を超えたか？

などと思いを馳せながら、テーブルを回り込んで座布団に腰を下ろした。

ブウウウウウウウウウウウ……ウウ。

「ぎやははははははははははは！ こいつ放屁しやがったあ！」

爆笑中のタヌキに無言で座布団を投げ付ける。

ぼすつ。ごんつ。

顔面に座布団を食らったタヌキが、勢いで壁に後頭部をぶつけた。

「……まあ、なんだ。俺が何者なのか、まずそれを教えなきゃな」

涙目で頭をさすりつつ言うタヌキ。俺は尻の下、すっかりペシヤンコになったブーブークッションを投げ捨てた。

タヌキは真剣なまなざしで、こう告げた。

「俺は宇宙人なんだ」

ちやぶ台返し。

ごっ。

しかしテーブルは壁に衝突しただけで、タヌキは素早く逃げおおせた。

「地球人は野蛮だな」

ゴロゴロと転がったまま、タヌキが言う。

「タヌキだろ、おまえ」

「宇宙人だつて言ってるだろ？」

「全身オレンジ色のタヌキだろ？」

「何を言うか！」

急に声を荒げて、タヌキは拳（前足？）で畳を叩き付けた。わかりづらいが、七、八本の眉毛が吊り上がっている。

「これを見ろ！」

おもむろに立ち上がったタヌキが腹を指す。

3〜4センチの二筋の赤毛。

「何それ」

「見ての通りだ」

もしかして。

「……メツシュ？」

「すぐにわかれ。ったく、地球人は流行が遅れてやがる」

タヌキの分際で舌打ちなんかするし。

「それ、流行ってんの？」

「若者に大人気」

前足の親指を立てるタヌキ（自称宇宙人）。

「ダセエ」

率直な感想を述べていたらタヌキはたいそう立腹したようで。

「わかんねえかなあ。男なら見えない所にこだわるのがオシャレだろ？」

ちよつと高い所に手を伸ばしたり、腕組みを解いた時に見える二筋の赤い毛　世の女は右から左までメロメロよ。

見たところ、地球人にはファッション性が見られないな。侵略・征服の暁にはそこから何とかしないとな」

タヌキはどこまでもマジだ。

「男だったのか」

「女に見えるか？」

「メロメロか」

「腰砕けよ」

「侵略？」

「そう」

「征服って？」

「俺の目的」

.....
付き合いきれない。

ゴロンと俺は横になり、テレビを見る事にした。

『 本日未明、 市在住の主婦』

ぶつつ。

突然真っ暗になったブラウン管に俺と、リモコンを持ったタヌキが映る。

「やめてくれる？」

「話を聞け」

ぴっ。仕方なく、俺はテレビのスイッチを直接押した。

『 田島直人（29）を容疑者として』

ぶつつ。

「.....」

また消され、タヌキを睨む。

「話を聞け」

スイッチを入れる。

ぴっ。

『 中央高速道路を走行中』
ぶつつ。

ぴっ。

『トラックが家屋に突入し』

ぶつつ。

ぴっ。

『パレスチナは今、かつてない熱気に包まれ』

ぶつつ。

ぴっ。

『容疑者は未だに意味不明な』

ぶつつ。

ぴっ。

『川の中に捨てられた凶器を探しており』

ぶつつ。

ぴっ。

『どうだい、腹筋が火を噴き始めたろう？』

ぶつつ。

ぴっ。

『判定！ 黒！』

ぶつつ。

ぴっ。

『週3〜4ですね』

ぶつつ。

ぴっ。

『と供述している』

ぶつつ。

ごすっ。

我慢の限界に達した俺は踵でタヌキを蹴飛ばした。
巧みにチャンネル変えたり小技利かせやがって。

「聞いてくれよ話を」

泣いてるし。

一際でかいたため息をついてから、とりあえず付き合ってやろうと決めた。

寝ようとしても、どうせジャマするだろうし。こうなったら気が済むまで話をさせてやろう。

「んじゃあ、まず……そうだな、どの星から来たんだ？」
「俺の星が知りたいか！」

やおら元気になったタヌキ。

「知りたい知りたい」

そしてやる気のない俺。

「地球で言う北極星ってあるだろ？」

「ああ、あるねえ」

「あれのとなり」

「わかるかよ」

「あ、左隣り」

どいっつ。

「……本当なんだってのに」

頭のとっぺんのコブをさすりつつ、ふてくされるタヌキ。

「じゃあ、地球に来た目的は？」

「侵略と征服」

「こんなところで茶あ飲んでえ？」

「下見だよ、下見」

口の左端を吊り上げ、不敵なつもりらしい。

「どうして征服なんかすんの？」

「愚問だな」

「寝るわ」

「まあ聞けって」

そそくさと立ち上がろうとした俺の肩に獣の手が乗っかる。

「地球はな、ずいぶん昔から俺らに監視されてんのよ。」

その間に見るに堪えないほど廃れて来たし、ここらでは唯一住みやすい星が危険に瀕している　ここで俺の登場だ！

星を汚す生物を絶やし！　元来の住みやすい環境に戻す！

そして酒池肉林！！」

「飛躍したな」

「ビバ　ハーレム！！」

ぴろりろりんっ

「敵襲！？」

「メールだって」

突然慌て出したタヌキを一殴りしてから、ジーンズのポケットからケータイを出す。

「女か」

液晶に映ったメール画面を脇から覗き込むタヌキ。

「バイトの友達」

「女の名前だな」

「ジャマ」

首根っこ捕まえてタヌキを放ってから、俺は短いメールを読んだ。

『おたがいにバイトおつかれっ。今度あそぼ（はあと）』

相手は1コ下で、気が合う女。ただいまフリー。

惚れてる。

思わず握り拳。

「告れ」

「わあ!!」

額にでかいコブをこさえたタヌキがいきなり顔を寄せた。

「チャンスだぞ、信！ 他のヤツに盗られる前に奪え、信！ 幸せな恋人生活だ、信！」

「気安く名前を連呼すんな！」

めりっ。

顔面に蹴りを入れる。

「……気安く蹴るな」

あらぬ方向へ曲がつた鼻を直しながら、涙目のタヌキ。タヌキは居住まいを正すと咳払いを一つして。

「そこに正座しろ。俺が男女関係ってーもんを説いてやる」

えらそーに。

「タヌキから何を教わんだよ？」

「いいから正座しろ」

「たぬきが何教えんだよ？」

「男女關係」

「アホくさ」

「ずっと居座るぞ」

それは困る。

しかしタヌキの前で正座つてのもシヤク。

俺は手近にあった座布団を引き寄せると、その上にあぐらをかい

ブ
ウ
ウ
ウ
ウ
ウ
ウ
ウ
ウ
ウ
ウ
.....

いつのまに。

「ぎやははははははははははは！ 同じ手に引っかけてんの

座布団じゃなくても座れんだろ！

え！？ 放屁野郎！ こいつ、あつたまワリイ！！」

かくして、堪忍袋の緒は切れた。

「こんの……タヌキいいいいいいいい！！」

座布団を思い切り振りかぶった　その時！
カッ！

「うわっ！？」

いきなり窓の外から金色の光が激しく差し込んだ！
あまりの眩しさで目の前が真っ白く……！

「やべっ、時間だわ」

強くつぶつたまぶたのせいでタヌキがどんな顔してるのか、さっぱり見えない。

「は！？」

「だから帰る時間。門限うるせーんだよ」

帰る時間？　門限？

「んじゃ、また来るわ」

また……来る！？

「てか来んなよ！」

……あれ？

金色の光が消え、目を開くと　俺の指は何もない壁を指してい

た。

部屋には俺だけ。他には誰もいない。

テレビから出るバラエティ番組の笑い声が響いて消える。

寒い　窓が開いているのに気付いて、閉めた。

何もなかった…のか？

ふと。

畳に落ちていた赤い毛を一本、見つけた。

テーブルの上にあった茶碗からは、まだ湯気が上っていた。

あれから三ヶ月。タヌキの姿は見えていない。

もしかしたらただの夢だったのかもしれない。

どっちにせよ、いなくなってもらって助かった。うるせーんだよ、あいつ。

ま、体験が体験だけに、一切他言していない。

てか、できねーだろ。

赤のメッシュ入れたオレンジのタヌキ（自称宇宙人）のおかげで告白できたんだ　なんて、彼女に言えやしないんだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3628d/>

メッシュ・ザ・タヌキ

2010年11月11日19時18分発行